

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第5号（侯燦先生来日記念号）
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 5 p.1-p.4
Issue Date	1989-01-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78815
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報

第5号

1989年1月1日 (侯燦先生来日記念号)
吐魯番出土文物研究会

【は じ め に】

新疆社会科学院文物考古研究所の副研究員で、トゥルファン文書について多くの論文を発表されている侯燦先生が、「特別シンポジウム：楼蘭を考える」に特別ゲストとして出席するため、朝日新聞社の招きにより、中国科学院地理研究所副研究員の王守春先生とともに、昨年一二月三日から一週間の予定で来日されました。侯先生は今回が初来日ですが、東京大学東洋文化研究所の池田温先生の発起により、侯・王両先生を囲む懇談会が企画され、一二月四日(日)午後二時から同研究所の第二会議室において、侯先生から現地における調査・発掘活動の経験を踏まえた貴重なお話を伺うことができました。当日のお話の内容は、既に先生の「吐魯番学与吐魯番考古研究概述」(『新疆文物』一九八七年第三期)や、「吐魯番学研究成果述要」(『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』一九八八年第一期)などのなかに、より具体的に述べられていますが、当日は、闕氏高昌国の紀年の問題と、漢代の高昌壁の問題について、新説を提示されました。そこで、懇談会を企画・主催された池田先生のご了解を得て、とくにこの二点の問題に関する侯先生の所説を以下に紹介するとともに、当日会場で配布された侯先生の略歴・主要著作目録を転載することに致しました。池田先生、ならびに当日通訳の労をとられた谷豊信氏(東京国立博物館)、録音を担当された伊藤敏雄氏(筑波大学歴史人類系)に厚く御礼申し上げます。

なお当日出席された方々は、以下の通りです(五〇音順・敬称略)。

荒川正晴(早稲田大学第二文学部)／池田 温／伊藤敏雄／榎本淳一(東京大学大学院)／大津 透(山梨大学教育学部)／片山章雄(東洋文庫)／澤 章敏(早稲田大学大学院)／關尾史郎(新潟大学人文学部)／臺信祐爾(東京国立博物館)／谷 豊信／土居淑子(成城短期大学)／町田隆吉(東京学芸大学附属高等学校)



闕 氏 高 昌 国 の 紀 年 に つ い て

《編者註：編纂史料がこの闕氏高昌国について述べるところは、四六〇年に闕伯周が柔然から高昌王に擁立されて成立したが、王位がその子の闕義成・首歸兄弟に継承されたあと、四八一年に高車に倒された、という程度に過ぎず(『魏書』卷一〇一高昌伝)、その元号については全く不明であるほか、存続期間についても検討の余地を残している。ようやく近年、トゥルファン文書に対する分析を通じてこの問題についても見解が提示されるようになってきたが(侯先生にも専論がある→目録(6)、(12))、残念ながら定説と呼べるような見解をもつまでには至っていない。なお編者の判断で註を付した。》

闕氏政権は柔然の元号である永康(四六四年～四八四年)や太平(四八五年～四九一年)などの元号を使っていたということになっている。しかしこの闕氏政権についてはよくわからない点が多く、とくに四六〇年の成立から、柔然の元号を使うようになる四六四年の間の元号が明らかでなかった。しかし私は、この政権は四六一年から四六五年にかけ

て、白雀ないしは龍興という元号を使っていたのではないかと考えている。ただしこの問題については、いまだ意見の一致をみておらず、とくに龍興に関しては、呉震先生が龍興であろうとしているものの¹⁾、最初の発掘の記録を見るかぎりでは龍昇となっているのである。呉震先生は文書を書写する時、問題の字を「典」と書き写し、これが「興」であろうと解釈されたのである。これに関して私は文書をまだ実見していないが、要するに記録では龍昇となっているのであって、これを果たして呉震先生のように龍興と判読して良いのかどうかも疑問があるということである。ともあれ、この白雀ないしは問題の龍興という元号のあとに、闕氏政権は柔然の元号を使ったのであり、それが永康であり、また太平という元号だったのである。ただし太平については、出土文書から判断する限り、四八九年から四九一年までは建初という元号が使われていたと考えられるので²⁾、その終末を四九一年とすることはできない。

なお闕氏政権のあと、四九一年から五〇一年にかけて、張氏（張孟明）政権、馬氏（馬儒）政権と続くが、いずれの政権についても元号の詳細を知ることはできない。

- 1) 呉震「吐魯番文書中の若干年号及相關問題」（『文物』1983年第1期）、26頁～27頁。ただし、呉震氏は龍興を後涼の元号とし、元年を西暦三九六年に比定している。なお龍興については、關尾「『龍興』紀年の随葬衣物疏考－『吐魯番出土文書』割記（6）－」（『史朋』第21号、1987年）をも、参照。
- 2) 建初については、白須「『吐魯番出土文書 第一冊』－その紹介と紀年の考察－」（『書論』第18号、1981年）をも、参照。

漢 代 の 高 昌 壁 に つ い て

《編者註：高昌壁の所在についても定説はないが、侯先生の見解は考古学の発掘調査の成果を踏まえているという点で貴重なものといえよう。なおこの問題に関しても既に専論がある（侯燦「高昌壁・高昌郡・高昌国」〈『新疆日報』1982年8月21日〉。東洋文庫で閲覧が可能）。》

漢代の高昌壁が吐魯番盆地のどこに設置されていたのか、という問題については、現在の高昌故城ではないか、という説があるが、私見では（高昌故城の北方に位置する）勝金口（センギム・アギス）ではないかと思う。勝金口にはその中心とはずれに二つの大きな寺院址があるが、その寺院址のあいだに高昌壁が位置していたと考えられる。なぜならば、現在寺院址の真中を通っている道路から建築址が発見されたが、そこからさらに漢代の壁画が発見されたからである。これは、場所こそ離れてはいるが、内蒙古自治区の和林格爾で発見された後漢の壁画墓³⁾に非常に風格が類似している。また、兵士が駐屯していた高昌壁は軍事上重要な位置、交通上の要衝に置かれたはずだが、勝金口はこの点においても、その条件を満たしている。したがって高昌壁は、勝金口に設置されていたと考えられるのである⁴⁾。

- 3) 内蒙古自治区博物館文物工作隊編『和林格爾漢墓壁画』北京 文物出版社、1978年、参照。
- 4) 位置に関するものではないが、王素「高昌故城の形成」（『中国文物報』第28期 1988年7月15日）は、高昌壁について文献学の立場から検討を加えており、有益である。

侯 燦 先 生 略 歷

1936年12月27日 四川省に生まれる。

1961年 9月 四川大学歴史系考古專業を卒業。

1974年 2月 新疆維吾爾自治区博物館文物隊に所属（1979年5月まで）。

1979年 5月 新疆維吾爾自治区社会科学院考古研究所に入所（現在に至る）。

1979年11月～12月 樓蘭調査（第一回）に従事。

1980年 4月 樓蘭調査（第二回）に従事。

1985年 「論樓蘭城的發展及其衰廢」が、自治区哲学社会科学学会聯合会主催の1979年～1985年自治区哲学社会科学優秀成果評獎において、歴史考古部門の二等獎を獲得。

1988年12月現在 新疆維吾爾自治区社会科学院文物考古研究所副研究員兼新疆師範大学歴史系副教授。

侯 燦 先 生 主 要 著 作 目 録

（*は未見）

- * (1) 「吐魯番地区考古調査簡介」『新疆考古』1980年第1期
- * (2) 「試論西域戊己校尉」『新疆史学』1980年第1期
- (3) 「北凉緑禾年号考」『新疆社会科学』1981年第1期
- (4) 「西域重鎮交河城故址」『文物天地』1981年第4期
- (5) 「樓蘭遺跡考察簡報」『歴史地理』創刊号 上海 上海人民出版社 1981年
- (6) 「西晋至北朝前期高昌地区奉行年号之探討」『考古与文物』1982年第2期
- (7) 「前凉年号新考辯」『新疆社会科学』1982年第2期
- (8) 「升平十一年王念亮駝契及其説明的歴史問題」『考古与文物』1982年第5期
- (9) 「從考古考察与調查論樓蘭城市的發展及其環境變遷」『新疆社会科学研究』1982年第7期
- (10) 「樓蘭考古」『歴史教学問題』1983年第2期
- (11) 「漢晋時期的西域戊己校尉」『西北史地』1983年第3期
- (12) 「新發現的高昌王闕首婦和麴嘉年号考」『西北史地』1984年第1期
- (13) 「論樓蘭城的發展及其衰廢」『中国社会科学』1984年第2期
☆英訳：Hou Can, The Rise and Fall of Loulan, "Social Sciences in China" VI-1, 1985.
- (14) 「李柏文書出土于LK説」『新疆社会科学』1984年第3期
- (15) 「高昌麴氏王国郡県城考述」『新疆社会科学研究』1984年第5期
- * (16) 「高昌大旦渠封戴墓表考釈」『新疆社会科学研究』1984年第11期
- (17) 「麴氏高昌王国官制研究」『文史』第二二輯 北京 中華書局 1984年
- (18) 「唐滅高昌郡県城正誤」『新疆社会科学』1985年第1期
- * (19) 「和田河綜合考察簡介」『新疆社会科学情報』1985年第1期
- (20) 「唐代兩件申請過所的文書」『考古与文物』1985年第2期
- * (21) 「《魏晋樓蘭屯戍考》評介」『新疆社会科学情報』1985年第2期

- (22) 「楼蘭出土糜子、大麦及珍貴的小麦花」『農業考古』1985年第2期
- (23) (奚国金氏と共著)「李柏文書出土于LK析疑－兼与孟凡人同志商榷－」『考古与文物』1985年第3期
- * (24) 「新疆考古工作的主要收穫」『歴史教学問題』1985年第6期
- * (25) 「殖民主義者对新疆文物文書の劫奪与各国的研究」『新疆社会科学情報』1985年第10期
- (26) 「麹氏高昌王国郡県城考述」『中国史研究』1986年第1期
- (27) (彭琪氏と共著)「吐魯番学研究資料与著述論文編目」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1986年第1期
- (28) 「楼蘭考古取得重要收穫」『文物天地』1986年第1期
- (29) 「荒漠中的古城－楼蘭考古紀実－」『文物天地』1986年第5期
- (30) 「大凉且渠封戴墓表考釈」黄盛璋編『亞洲文明論叢』成都 四川人民出版社 1986年
- (31) 「楼蘭古城考古調査」『新疆年鑑』一九八六年版 烏魯木齊 新疆人民出版社 1986年
- (32) 「麻札塔赫古戌堡の考察」同上
- * (33) 「吐魯番学研究粗纂」『新疆社会科学研究』1987年第1期
- (34) 「從麻札塔格古戌堡考察看絲路南道走向与和田綠洲的變遷」『新疆文物』1987年第1期
- (35) 「高昌章和十三年來阿定妻楊氏墓表出土時間、地点与有關問題補論」同上
- (36) 「吐魯番学与吐魯番考古研究概述」『新疆文物』1987年第3期
- (37) 「死海中的古戌堡－和田河考古記－」『文物天地』1987年第3期
- (38) 「西域遺珍－高昌主客長史陰尚口造寺碑与李柏文書解説－」『新疆文物』1988年第1期
- (39) 「吐魯番学研究成果述要」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1988年第1期
- (40) 「楼蘭新出土木簡紙文書考釈」『新疆文物』1988年第2期
- (41) 新疆楼蘭考古隊(侯燦先生主筆)「楼蘭古城址調査与試掘簡報」『文物』1988年第7期
- (42) 同上「楼蘭城郊古墓群発掘簡報」同上
- (43) 「楼蘭新發現木簡紙文書考釈」同上

★なおこのほか、『新疆日報』をはじめとする新聞紙上に執筆多数。

(以上)

【おしらせ】本文でも紹介致しました侯燦先生の「吐魯番学研究成果述要」(目録(39))を、御覧になりたい方は、下記にある本研究会の事務局まで御連絡下さい。コピーをお送り致します。

事務局(連絡先) : 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

☎ 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会(The Research Society for Turfan Relics)